

A Comparative Study of Site-Specific Distribution of Aging-Related Tau Astrogliopathy and Its Risk Factors Between Alzheimer Disease and Cognitive Healthy Brains: The Hisayama Study

八木田, 薫

<https://hdl.handle.net/2324/7182359>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名： 八木田 薫

論文名： A Comparative Study of Site-Specific Distribution of Aging-Related Tau Astrogliopathy and Its Risk Factors Between Alzheimer Disease and Cognitive Healthy Brains: The Hisayama Study

(アルツハイマー病と健常脳における加齢性タウアストログリオパチーの局在および寄与因子の比較研究：久山町研究)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

リン酸化タウ蛋白がアストロサイトに集積する病理所見は、各種神経変性疾患のみならず健常高齢脳でも観察されることが古くから知られていた。その病理学的意義に関しては不明な点が多く、タウ陽性アストロサイトを包括的に評価・研究する事を目的に2016年に加齢性タウアストログリオパチー (aging-related tau astrogliopathy; ARTAG) という神経病理学用語が提唱された。しかしながら既知のARTAGに関する研究はブレインバンクに集積された疾患脳を基としたものであり、健常高齢者での知見は乏しかった。

我々は主に健常高齢脳(47例)、アルツハイマー病 (Alzheimer's disease; AD, 41例) から成る久山町一般住民の連続剖検例(110例)を対象として研究を行った。各脳部位におけるARTAGを半定量的に評価し、臨床情報・神経病理所見との関連を分析した。

ADを含む各種神経変性疾患および健常高齢脳では、扁桃体で最も頻繁にARTAGが観察された。特に健常高齢脳では扁桃体にARTAGが限局している症例が多かった。一方でADでは灰白質におけるARTAGが被殻・中前頭回で扁桃体に次いで多くみられた。ロジスティック回帰分析では健常高齢脳におけるARTAGは死亡時年齢と神経原線維変化の水準(neurofibrillary tangle Braak stage)とに有意な正の相関がみられた。ADでは死亡時年齢と男性であることがARTAGの程度と有意な関連が見いだされた。またADでは老人斑の広がり (Thal phase) が高度な症例で白質のARTAGが多く観察された。

本研究では神経変性・加齢性変化の背景が異なれば、ARTAGの分布や寄与因子が変化することが示唆された。